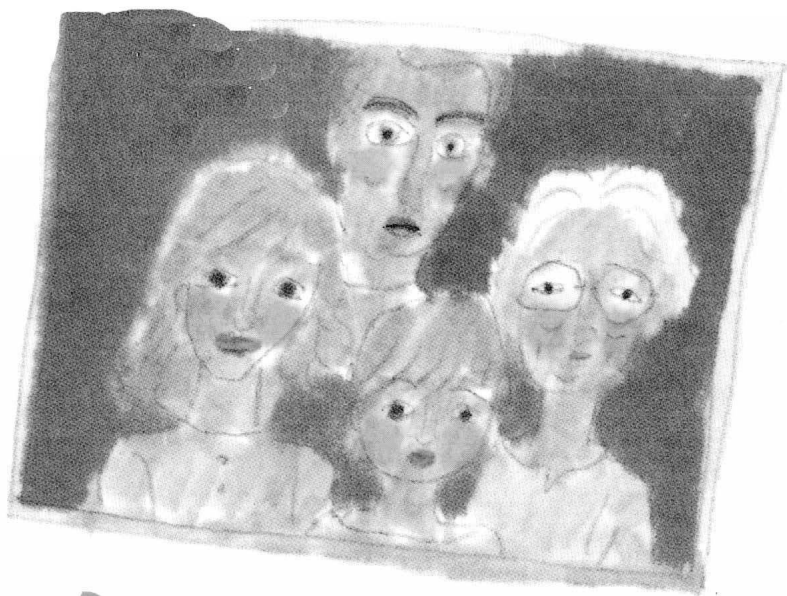


小林千登勢

袖すりあふも
嫁女



主婦と生活社



小林千登勢

袖すりあふる
嫁女

主婦と生活社

袖すりあうも嫁姑

著者

小林千登勢

発行者

村川修二郎

発行所

主婦と生活社

〒104 東京都中央区京橋 3-5-7

TEL 販売部 (563) 5121 編集部 (563) 5135 振替東京0-36364

印刷所

太陽印刷工業株式会社

製本所

小泉製本株式会社

© CHITOSE KOBAYASHI 1985, Printed in Japan

(乱丁・落丁本は、当社でお取り替えいたします)

ISBN 4-391-10852-6

本書の内容を小社に無断で複写複製することを禁じます

袖すりあうも嫁姑 目次

はじめに 顔まで似てきた嫁姑……………9

1章 駆け出しママとおばあちゃん……………11

真面目パパの浮気の虫……………12

デビ夫人、メイコさんの秘子づくり術……………17

わが子よ！……………24

おばあちゃん駆けつける……………34

2章 わが家のカルチャーショック……………39

“お” 抜きの萩弁にびっくり……………40

おばあちゃん式家事の落とし穴……………45

栄養をめぐる口ゲンカ……………49

いっしょくた洗濯と入浴法……………54

冷蔵庫は神様です……………61

3章 嫁姑、育ち違えばなんとやら……………67

幼くして母に死に別れ 68

縁結びの懷中時計 73

命からがらの引き揚げ体験 78

女優を目指して歩きはじめる 82

メモの裏のプロポーズ 86

4章 同居九年目の大げんか……………91

おばあちゃんの家出 92

ママに巣くった欲の虫 97

親子水いらずが実現したが…… 100

この家におらしてください 105

十年が勝負の嫁姑 109

5章 おばあちゃんの〃なくて七癖〃……………113

出歩きバアさんというけれど 114

電話もなにかとトラブルのもと 119

私の部屋に入らないで！ 124

おばあちゃん交友録 128

山本家の“わ” 135

6章 姑と母の複雑な関係…………… 141

実家での居候生活 142

おばあちゃんと母の短かった蜜月 146

母の合理主義 152

わが家の血液型さわぎ 156

7章 おばあちゃんとザ・ファミリ…………… 161

涙って、うれしいときにも出るんだね 162

麻利央のおばあちゃん最前 170

パパと麻利央の甘い関係 174

うちのパパは掃除魔 179

ケンカはいつでも一対一 184

8章 私の周辺の嫁姑 189

美貌も損なわれた友人 190

離婚した友人の話 196

男性にもある姑問題 201

テレビドラマの嫁姑 205

9章 十三年の歳月から得たもの 209

おばあちゃんの大変身 210

わが家の辞書にない言葉 218

口ゲンカつきあい術 224

袖すりあうも嫁姑 227

装
丁
村
上
豊

袖すりあうも嫁姑

はじめに 顔まで似てきた嫁姑

「どうしてお宅は、そんなにうまくいつてるの？」

と、わが家を訪れる友人達は、異口同音に質問する。そのたびに姑は、

「私がいいからですよ」

と言い、すかさず私も言い返す。

「なに言ってるの、私がいいからよ」

しかし、わが家といえど、本音半分のこんなやりとりができるようになるまでには、十年の歳月が必要だった。それまでは二人の間に精神的な葛藤もあり、大きなケンカも何度かあった。だが、そのケンカのしこりをあとに残さず、その場その場でぶつかり合ってたことが、結局はプラスになっているのかもしれない。

十年の歳月を経れば、お互い相手の性格も大抵は読みとれ、危険な領域にはなるべく入らないような生活の知恵も身についてくるものだ。

こんな調子で長い間暮らしていると、もともと他人の嫁姑は顔まで似てくるものらしい。近頃では家族そろってレストランに行っても、「さすが親子ですね。声といい、顔といい、よく似ていますね」と、夫ではなく、姑と私をさして言うのだから。

そんなとき、姑も私もにこにこして、反論したこともない。

「私は、昔はよく築地小町と言われたもんですよ」と、いつも自慢している姑に似て、私はうれしいと思っているし、姑も私の母とまちがわれ、まんざらでもないようだ。

しかし、考えてみれば、所詮、姑は実の母ではないのだ。姑はよく知人に、

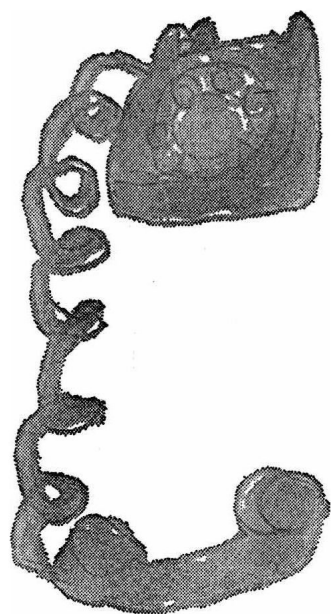
「ママ（私のこと）のことは嫁とは思っていませんよ」

と言っているが、これはたてまえ。私は姑にとって娘ではなく、あくまで嫁。つまり、血のつながっていない他人なのだ。その証拠に、姑は私のことを名前を呼ばずに、ママ、
と言いつつ、私はどうしても「お母さん」とは言えず、「おばあちゃん」と呼んでいる。

しかし、この他人である姑がいなければ、夫はおらず、夫がいなければただ一人の私の分身である娘もいないのだと考えると、姑の存在はすごく近いものに思われてくる。それだけに一番やっかいな他人なのかもしれない。

わが家は、姑・夫・私・娘の四人暮らし。広くもない都会のマンション生活では、正直なところ、息のつまることもある。

姑と暮らしはじめて十三年、このマンションのなかで起こったわが家のドラマを、ありのままに、仕事の合間、合間でペンをとってみた。嫁、姑の問題で悩んでいる方達に少しでもお役にたてたら……と、そんな願いをこめながら。



を。

1章

駆け出しママとおばあちゃん

真面目パパの浮気の虫

私とおばあちゃんがひとつ家族として暮らすようになってから、もう十三年にもなるが、一緒に暮らす以前からおばあちゃんは私達夫婦の、カギを握る人であった。

私と夫の耕一が今も夫婦でいられるのは、実はおばあちゃんのおかげなのである。

あのときのおばあちゃんのひと言がなかったら、娘が生まれることもなく、私も山本という姓でいたのかどうか……。

ふとそんな思いにとらわれていると、

「ママ、ママ、このテレビおもしろいよ」

とおばあちゃんに肩を揺すられ、ハッと我にかえった。

目の前のテレビでは、司会者が「夫婦の離婚が一番多いのは、結婚三カ月、三年、七年のいずれでしょう」と出演者に質問している。

私の視線を素早く捉えたおばあちゃんが、「ねっ」と目で合図を送ってよこした。と、

突然大声で、

「あたしや、こういうことにはプロ、プロ……、ママ、プロなんだったっけ」

「プロフェッショナルでしょ」

「そうそう。そのプロへ、シヨナルなんですからね。きまっていますよ。あれですよ」

おばあちゃんのあれというのは、三年という意味である。

これはおばあちゃんと私だけの秘密なのだが、ちょうど夫と結婚して三年目、まだその頃は浜田山で末の息子と暮らしていたおばあちゃんに、

「私、離婚しようと思うの」

思いあまって電話をしたことがあった。

原因はズバリ、夫の女性問題。当時新劇にいた夫に、共演中の同じ劇団の女優から、それこそ毎晩のように電話がかかってくるのである。

新劇といえば地方巡業が多くて、しょっちゅう旅ばかりしているし、その間、問題の女性とは舞台だけでなく一緒に行動することになる。さすが勝ち気な私も、そのときばかりは深刻に悩んでしまった。

もちろん女優をしていれば、相手役に好意をもつようになることもあるぐらいいは、私だって経験上よくわかっているつもりだった。

けれど、あの真面目な夫に限って……。

真夜中、ヘッドボードにある電話のベルが鳴る。スッと夫の手が伸び、受話器をとる。「あの女優だ！」と私は直感し、息を殺していると、夫は私のことを気にしてか、ただ、「ウン」「ウン」と困ったような返事をし、最後に「じゃね」、ガチャンと電話を切ると、そのまま寝込んでしまうようなことが何回かあった。

問い詰めると、いつも夫は、

「馬鹿なことを言うなよ。相手役なんだから、たまにはお茶を飲むことぐらいあるさ」と私の気持ちをまともに取り上げてくれない。

まさか、まさか、というイライラした気持ちのまま、夫が一カ月の地方公演に出掛けるときがきた。

それでも夫は内心私の気持ちを察していたのか、

「彼女とは舞台以外では絶対に行動を共にしないから」

という言葉を残して旅立っていった。

ところが、東京に久しぶりに降った大雪が、夫にとって禍^{わざわい}してしまった。

その日、私達のマンションに遊びに来ていた私の妹が、東京でもこんなにすごいんだから東北はさぞかし大変だろうと気をきかせ、夫の泊まっている宿へ電話をしてしまった。